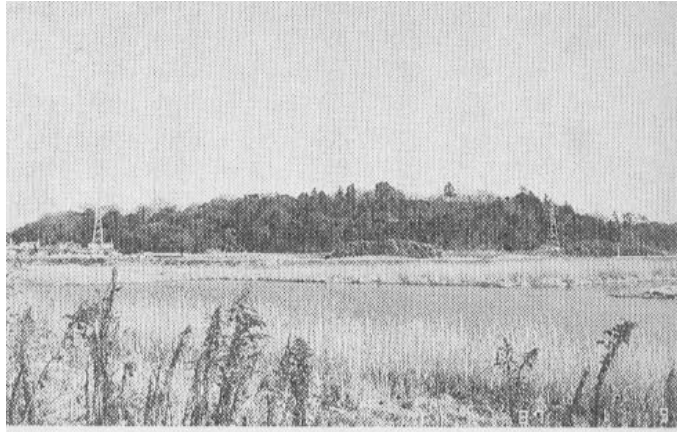


親胤

嫡男の親胤が千葉介となる。彼の主要な動きをみつとまず最初に、新しい城をつくり、移ろうとしたことである（『千葉伝考記』）。しかし、親胤の在世中には、未完に終わっており、鹿島大与次（昌胤の弟



4-16図 鹿島城遠景（佐倉市）

で胤重という）を配属したのみで、親胤地震は移らなかったようである。この城を鹿島の新城といい、旧城を佐倉城と称した。また、代々の菩提所である海隣寺を新城の傍に移している。なお、鹿島新城は、後述の邦胤の時代に北条氏政のすすめにより工事が再開され、ほぼ出来あがったといわれている。近世佐倉城の本丸、二の丸、椎ノ木郭にあたる部分を占めていたという。二番目には対外的なことになるが、北条氏康父子を助けて活躍したことである。

ところで、七歳で千葉介の地位についた親胤の死はあまりにも無残であった。『千葉伝考記』によれば、

（前略）親胤若年なりと雖も勇氣胆力人に超えたり、されども剛腹驕慢にして国政をなすに往々私あり、故に氏族諸臣之を疎んじ信服せず其兄胤富に家督を継がしめんと弘治三年八月七日佐倉城中に於て猿樂を催し親胤をして之を觀せしむ。親胤其の危

機を察知し窃に妙見社内に隠れんとする所を家臣小野某追跡し来り涉十兵衛といふ者をして親胤を試せしむ。時に十七。法号眼阿弥陀仏。又総泉寺殿月窓常円大禪定門といふ。

とあり、また『千葉実録』には、
此の人、悪逆無道にして家を治め難く、潜に鳩毒を以て弑せられる。御前衆女房に至るまで、心に叶はざれば、御座或は書院先にて、場所を嫌わず手打にし給ふ。然る処に、親胤の怨念悪靈となりて種々崇りをなし、是より自然に御家衰へ、不幸短命の端を生ずるなり

と記している。特に、「親胤の怨念悪霊となりて種々崇りなす」のを鎮めるために阿弥陀三尊(今亡)がつくられたことが、中路定俊の『成田名所図会』巻四所収の海隣寺の浄慶作阿弥陀如来の銘文によって裏付けることができる。参考までに銘文を記してみると、

敬白

奉刻彫阿弥陀

如来并二菩薩像

平朝臣親胤眼

阿弥陀仏為頓証仏果之

爰以前離三有繫縛キ女

執速至安養無垢浄剰

無疑者也仍法界普利

下総国印東庄佐倉

長徳寺 開山 眼阿

仏師浄慶

千時永禄八年丑七月十四

於鹿嶋郷印旛郡

彫之

とある。造像の主旨は、平朝臣親胤眼阿弥陀仏の頓証仏果を目的として、安養無垢浄剰にいたることを念じ、法界を普く利することを願っている。また、千葉介親胤の為に建てられた高さ一一・五メートルをはかる宝篋印塔が海隣寺墓地にある。塔身に「南無阿弥陀仏」、基礎に「右意趣者為眼阿弥陀仏・弘治三年丁巳八月七日」と刻んでいる。